

合歡木(ネムノキ)

牡丹刷毛のようなネムノキの花が咲き始めると、梅雨明けは間近かである。八幡町四丁目付近から郷六にかけての広瀬川川岸は、ネムノキの自生密度が高く、国道 48 号の車窓からも、その淡紅色の花盛りを見ることができる。

ネムノキの葉は大型の羽状複葉。対生する多数の小葉は開閉運動を行い、夕方は閉じる。この現象を「眠る」に見立て、「ねむり木」の異名がある。中国では「合歡木」と書き、我が国でもそのまま当て字として使われている。合歡とは、同じ褥に寝ることを意味する。

ネムノキは正式な和名で古くはネブ、またはネムと称した。ネムノキの催眠現象は、万葉人も気付いていたようで、つぎの歌が詠まれている。

昼は咲き夜は恋ひ寝る合歡木の花君のみ見めや戯奴^{わげ}さへに見よ(巻 8・1461 紀女郎)

昼は花が咲き、夜は慕い合って葉を閉じるネムノキを、君(主君、つまり紀女郎のこと)だけが見てもよいものでしょうか。わけ(やっこさん)、あなたもその様子を見なさい、と年下の家持をからかっている歌。

紀女郎は皇族の安貴王と結婚したが、養老末期、王が女性問題で勅勘を蒙り追放処分になった。一人身の紀女郎は退屈しのぎに家持の来訪を促したのであろう。しかし家持はこの申し出に對し、

吾妹子^{わぎもこ}が形見の合歡木^{ねぶ}は花のみに咲きてけだしく実にならじかも(巻 8・1463 大伴家持)

私に下さったこのネムノキは、花だけ咲いて、もしかすると実を結ばないのではないのでしょうか、と断りの歌を贈り返している。

ネムノキの花咲く風景は、夏の風物詩として古来、詩歌に多く歌われているが、芭蕉が象潟の干満寺の精舎に足をとめて詠じた『象潟や雨に西施がねむの花』は、特に有名である。西施は春秋時代の呉王夫差の愛妃で中国古代の伝説的美女。雨にうたれて咲くネムノキの花に、悩める美女西施を悌にして象潟の墨絵のような風景を描写した名句である。ちなみに、西施棒心の語源は、西施が病気で常に胸に手をあてて悩んでいる様を見て、当時の女性達があのようにすれば美人に見えると考え、争って真似たという故事による。

ネムノキの材は環孔材。軽軟で強度は低く、胴丸火鉢や箆筒の前板など、用途は限られている。しかし、夏期に採取する樹皮は生薬で合歡皮といい、利尿、強壯、鎮痛に著効があるといわれる。

(大柳雄彦)

【解説】

ネムノキ(マメ科)

林縁・原野など日当たりの良い湿地に自生する落葉高木。本州・四国・九州・琉球に分布する。葉は羽状複葉で互生、小葉は 7～13 対で鋭頭。淡紅色の長い雄しべをたくさん出した傘状の花を枝先に咲かせる。花後、扁平で大型の豆果をつける。花を観賞するため庭園にも植えられる。

(富田美奈)

【写真】

